

今週の為替相場見通し(2021年6月14日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.19 ~ 109.84	109.68	108.50 ~ 111.00
ユーロ	(ドル)		1.2093 ~ 1.2218	1.2109	1.1980 ~ 1.2230
(1ユーロ=)	(円)		132.67 ~ 133.74	132.83	132.00 ~ 134.50
英ポンド	(ドル)		1.4074 ~ 1.4191	1.4114	1.4000 ~ 1.4180
(1英ポンド=)	(円)	*	154.14 ~ 155.32	154.74	153.50 ~ 155.80
豪ドル	(ドル)		0.7689 ~ 0.7775	0.7707	0.7670 ~ 0.7820
(1豪ドル=)	(円)	*	84.39 ~ 85.06	84.52	84.00 ~ 85.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 小林 元子

(1)今週の予想レンジ: 108.50 ~ 111.00 円

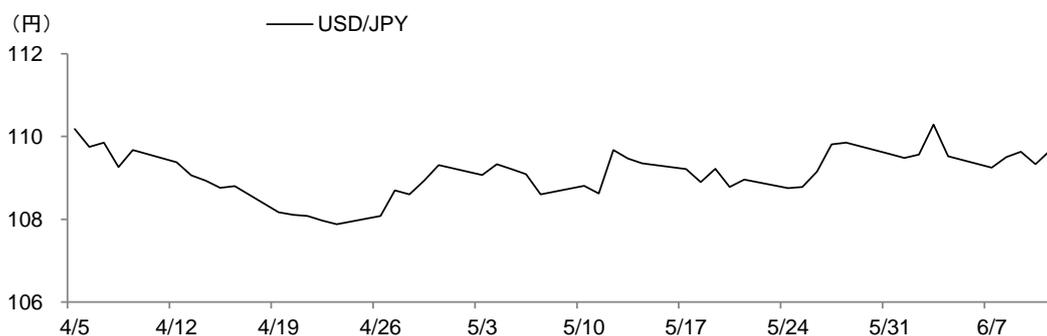
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週後半に高値をつける展開となった。週初7日、109.60円付近でオープンしたドル/円は、先週末の米5月雇用統計の結果を受けて、ドル売り地合いが継続。海外時間には、一時週安値の109.19円までじりじりと値を下げ、終日上値の重い推移となった。8日のドル/円は、仲値にかけて実需のドル買いが散見され、109円台半ばまで小幅に上昇。その後は、世界各地でのウェブサイト障害報道やFRBの早期金融緩和縮小観測が後退し、一時週安値付近まで下落した。9日、新規材料難の中、ドル/円は109円台半ば付近での小幅な値動きとなったが、米10年債利回りが約3か月ぶりの低水準を付けたことから、109円台前半まで下落。その後は、翌日にECB 政策理事会や米5月CPIの発表を控え、ポジション調整によるドル買いが散見され、109円台半ばまで値を戻した。10日、ドル/円は米5月CPIの強い結果を受けてドル買いが加速し、一時109.80円まで上昇した。買い一巡後は米金利が低下に転じ、109円台前半まで反落した。週末11日は、109円半ばでのみみ合い推移を続けていたが、NY時間に入り、米10年債利回りの回復を横目にドル/円も買われ、一時週高値の109.84円まで上昇。その後は109円台後半で小動きとなり、109.68円で越週した。

今週のドル/円相場は上値重い展開を予想する。マーケットでは、15(火)~16日(水)に開催予定のFOMCに注目が集まっており、テーパリングについての議論がされるとみられている。先週発表された5月米雇用統計では非農業部門雇用者数が予想を下回ったものの、失業率の低下や平均時給は市場予想を上回っており、雇用情勢の改善は継続。また5月CPIは市場予想を上回る結果となっており、米経済の回復を印象付ける形となった。しかしながら、FRB当局者の間では、依然としてインフレの高進は一時的であるとの見方が多く、早期テーパリングの実施にネガティブな反応をするメンバーが多く、今回のFOMCにおいても金融緩和政策の継続が予想され、よってドル/円については上昇は限定的となるか。予想と反し、米利上げ観測が再燃した場合は、一時的にドル高となる可能性も留意したい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(6/7~6/11)の値動き: 安値 109.19 円 高値 109.84 円 終値 109.68 円



2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 山口朋子

(1)今週の予想レンジ: 1.1980 ~ 1.2230 132.00 ~ 134.50 円

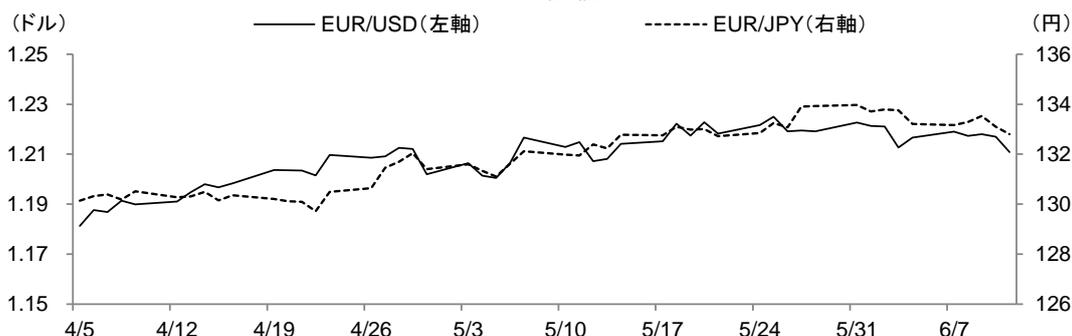
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半にかけて下落する展開。週初7日ユーロ/ドルは1.21台半ば付近ユーロ/円は133円台前半でオープン。6日の独ザクセン・アンハルト州議会選挙で国政与党のキリスト教民主同盟(CDU)の勝利が確実となり、総選挙前の最後の主要選挙で接戦を制したことから、欧州主要国の株式市場が堅調に推移。ユーロ買いも強まると一時1.22台を回復した。8日、欧州時間に発表された経済指標が強弱まちまちの結果となり、終日を通して1.21台後半での方向感の出にくい値動きとなった。9日、米長期金利の1.5%割れを受けてのドル売りからユーロ/ドルは一時週高値の1.2218まで上昇。その後は、翌日にECB政策理事会を控えていることから積極的にユーロを買い戻す動きは続かず、1.21台後半を推移した。10日のECB政策理事会では政策金利やPEPP(パンデミック緊急購入プログラム)の購入ペースについて据え置きが発表された。発表直後はユーロ買いで反応し、5月の米CPIの数字が予想を上回ったことでドル/円も上昇する展開にユーロ/円は一時週高値となる133.74円まで上昇した。ただし、ラガルドECB総裁が理事会後の会見でPEPPの終了の議論は時期尚早と発言したことを受け、ユーロ売りに転じた。翌11日もドイツ10年債利回りは大きく低下、さらにドル買い優勢の流れにユーロ/ドルは1.2093、ユーロ/円は132.67円まで下落し週安値を付けた。その後、週末のポジション調整が入るとユーロ/ドルは1.21近辺、ユーロ/円は132円台後半で越週した。

今週のユーロ相場は、下落を予想。ECB政策理事会では今年のGDP成長率を4.6%(3月予想は4.0%)、およびインフレ率については、1.9%(3月予想は1.5%)に上方修正した。一方で、PEPPの実施ペースについては、1-3月期から大きく加速させた4-6月期のペースを維持し、コロナ禍からの景気回復を最優先する姿勢を明確に示した。ラガルドECB総裁は、成長に対するリスクが「おおむね均衡している」と述べ、従来の「下向きに傾いている」から判断を強めたものの、コロナ後の金融政策を論じることは時期尚早との発言を維持した。PEPPの規模縮小を支持したのは数名とECB関係者が発言しており、金融緩和の長期化観測が強まっている。一方、今週15-16日は米FOMCが開催される。こちらも量的緩和策縮小に向けた協議が開始されるかが焦点となる。米国がテーパリングに少しずつ動き出しているのが確認されると、緩和姿勢を継続するECBとの方向感の違いから、ユーロは売られやすい展開となろう。また、英国では新型コロナウイルス変異株「デルタ」の感染件数が急増しており、今後欧州での拡大リスクについても警戒が必要。注目の経済指標は15日(火)のユーロ圏4月貿易収支、17日(木)のユーロ圏消費者物価指数。また、18-20日のECB戦略見直し会議の内容にも注目したい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(6/7~6/11)の値動き: (対ドル) 安値 1.2093 高値 1.2218 終値 1.2109
(対円) 安値 132.67 高値 133.74 終値 132.83



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.4000 ~ 1.4180 153.50 ~ 155.80 円

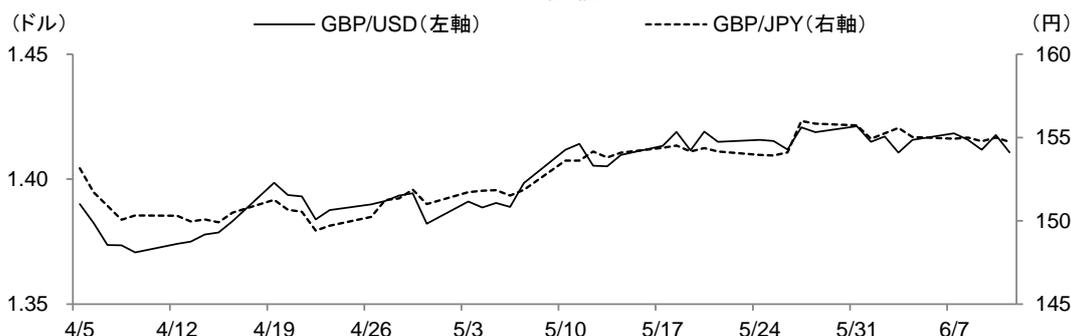
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、細かい上下動は散見されたものの、振り返って横這い。この間、英発のニュースでは、イングランド南西部コーンウォールで開催された米英首脳会談(10日)やG7(11日~)が耳目を集めたものの、ポンドに影響したのは、北アイルランドと英本土の間の交易を巡るEUと英の対立や、イングランド北部で猛威を振るう新型コロナ変異種(デルタ型)など、ポンド売り方向の材料だけだったように見えた。他に、金融市場の注目を集めたのは、9日の米5月CPIで、物価の高い伸びが米連銀による金融引き締め前倒し観測を強める可能性が警戒された。果たして、発表されたCPIは、高めの予想を更に上回る高い数字(前年比+5.0%)だったが、乱高下の末米長期金利は低下。前後して米10年債利回りは約3ヵ月ぶりに1.50%を割り込み、そのまま水準に低迷した。並行してドルは、ほぼ無反応か、むしろ堅調気味に推移。また、10日、ポンドは反転上昇したが、これは対ユーロでの反発に引っぱられた値動きと考えられた。同日、欧州中銀理事会は、政策金利を全て据え置き、パンデミック緊急購入策の規模を現状維持としたが、市場の一部では資産購入策の縮小を示唆する可能性などが観測されていたことから、これは「予想よりも鳩派的」と受け止められ、ユーロ安を誘った。週引けに掛けてのドル全面高も、ユーロ安の反面と考えることはできたが、米長期金利が低迷を続ける傍ら、ドルだけが1日遅れで欧州中銀のハト派姿勢に反応、上昇したというのは腑に落ちない解釈だった。ともあれ、このドル高の勢いで、ポンドも対ドルでは下押ししたまま週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、軟調気味ながら方向感を欠いた推移を予想。方向感を見出せないと思込むのは、この間の金融市場の反応があまりにちぐはぐで、腑に落ちないから。まず、米長期金利動向だが、この間、米5月CPIが「米連銀金融引き締め前倒しの是非を握る材料」として注目されていたのは間違いがない。それが、高めの予想よりも更に高い数字が出たにもかかわらず、米長期金利の続落、低迷を止められなかったのは、それだけ米国債購入圧力が強かったということではあろうが、不可解な反応と思われた。また、欧州中銀理事会が、想定以上に、緩和的な金融政策の撤回に及び腰だったことがユーロ売り要因だったのも確かだろうが、対ポンドや対円で発表直後から進んだユーロ安が、対ドルに限っては、何故か丸1日ちかくも時差を置いてやっと進んだのも良くわからない値動きであった。ポンド軟調を中心にみるのは、ここもと、英中銀高官から、金融引き締めの前倒しを示唆する発言が相次いでいるにもかかわらず、ポンドがほとんど材料視する様子が見られないから。5月27日の英中銀金融政策委員会ブリハ委員、6月1日のラムズデン副総裁に続き、この間も、ハルデー委員が「どこかの段階で金融緩和策の蛇口を閉め始める必要がある」「加速するインフレに対処しないことは『悪い間違い』」などと述べていた(9日)、ポンドの反応は極めて限定的だった。英経済指標は、15日(火)に英5月雇用統計、16日(水)に英5月CPI、18日(金)に英5月小売売上高などの発表が相次ぐが、ポンドが材料視する可能性は低い。他に、14日(月)には行動制限措置(ロックダウン)全面解除の是非に関する発表が予定されるが、上述デルタ型ウィルスの蔓延で延期される可能性が取沙汰されている(当初予定は6月21日(月)から解除)。仮に延期となれば、従来の反応(制限措置緩和はどちらかと言えばポンド押し上げ要因)に鑑みて、若干のポンド売り材料と読まれる可能性も考えられよう。

(3)先週末までの相場の推移

先週(6/7~6/11)の値動き: (対ドル) 安値 1.4074 高値 1.4191 終値 1.4114
(対円) 安値 154.14 高値 155.32 終値 154.74



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.7670 ~ 0.7820 84.00 ~ 85.50 円

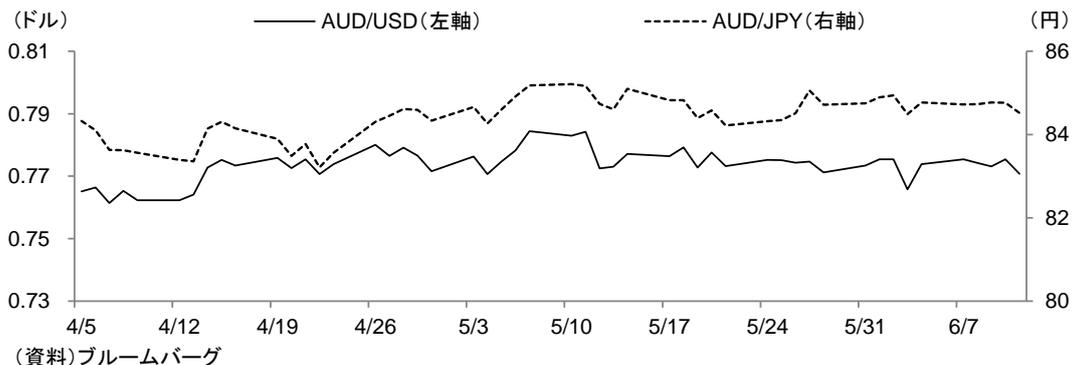
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは全般的に米CPI発表を前に手控え感があり、月曜から木曜にかけて50pipsのタイトレンジで終始した後、金曜は0.77台後半から大きく0.76台へ下落した。7日は期待外れとなった先週末の米5月雇用統計からドルの戻り売りが優勢となり豪ドルは0.7727から0.7766へ上昇した後0.77半ばで引けた。テーバリング期待の後退に来週のFOMCへの期待が調整される形となった。8日は特段の主要指標はなく手掛かり材料難の中0.7764から0.7732まで緩やかに下落し、タイトレンジで推移した。オーバーナイトでは米4月貿易収支が発表されたものの予想から大きく外れることはなく、値動きも限定された。9日は特段の主要指標はなく米CPI待ちで0.77台前半を中心にタイトレンジで振幅。シドニー時間13時過ぎ、中国が石炭価格の上昇を受け、石炭市場に価格管理導入を検討しているとの報道が伝わり、豪ドルは0.7744から0.7733へと僅かに下落。NY時間では米10年債利回りが1.5%台を割り、ドル売りとなる中、豪ドルは0.7762まで上昇した。その後はロンドンFIXにかけてドルが買い戻しとなり、フィクシング後もその流れが継続し豪ドルは0.7725近辺まで下落した。先週末の雇用統計からテーバリング期待は一服しているものの、CPI(前年比)の市場予想は高めの数字が出てきており、インフレ懸念は未だ燻っている。10日は米CPIが予想を上回ったものの、ここの一週間の0.7650-0.7770レンジ内に留まった。シドニー時間午前から米5月CPI発表を前にポジション調整とみられるドル買いがUSD/CADなどで継続的に出ていたものの、機関投資家による大口の豪ドル買いもあり、豪ドルは0.7730から0.77半ば手前まで上昇。強い内容であった米CPI発表直後はドル買いで0.7718まで下落したものの、米10年債利回りが下落に転じ1.5%を下回ると、事前にドルのロングポジションで仕込んでいた短期勢の利食い等でドルは戻り売りとなり、のちに豪ドルは0.7764まで上昇した。市場の反応は、新型コロナ禍で大きく落ち込んでいた去年5月のCPIと比較をすると前年同期比の数字が堅調に見えるだけ、というベース効果によるゆがみが影響しているとの冷静な判断となった。11日はドルの買戻しが優勢となり、ロンドン時間を通して豪ドルは0.77後半から0.76後半へと値を落とした。

今週は17日に米FOMC、豪RBAロウ総裁講演、豪5月雇用統計が予定されており、1日で盛りだくさんの材料が発表される。今回のFOMCはメンバーの金利見通しも発表予定されており、市場はFRBの出口戦略開始のタイミングに関して注目が集まる。また、豪5月雇用統計に関しては失業率は横ばいで推移するとみられているものの、雇用者数は増加し、労働参加率も上昇すると予想されている。予想を上回る場合は豪ドル上昇の追い風となる。但し先週の米5月CPI後のフローが一巡し、足許では米10年債利回りが1.5%台へ回帰する兆候がある。ドル買いが追随する場合は豪ドルは頭を抑えられるとみるが、今週は短期的抵抗線である0.7800を超え定着できるか確認したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/7~6/11)の値動き: (対ドル) 安値 0.7689 高値 0.7775 終値 0.7707
(対円) 安値 84.39 高値 85.06 終値 84.52



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。